

## 水田酪農におけるフォーレーハーベスタの稼働状況 (第2報)

岡部 正昭・上原 洋一

(福岡県農業試験場)

OKABE, M. and UEHARA, Y.

On the Operations of Forage Harvester on Dairy Farming  
in Paddy Field Area (II)

前報においてイタリアンライグラス収穫時のフォーレーハーベスタの稼働状況を、個人有・共有の2例について報告し、作業効率が低いことを指摘した。個人有ではあまり問題とならないが共有では作業の効率化が要求される。そこで、前報で種々の作業方法を検討し、実作業時間率60%以上、1日の作業面積約45aが期待できることを示した。

その2年後(49年)から共同利用がなされるようになったので、その調査結果を報告する。

## 調査方法

調査方法、作業の分類と内容は前報と同一。

49年から共有農家5戸の内1戸が個人で購入したので、個人有2台、共有(4戸)1台を調査した。

## 調査結果

作業方法は、個人有は従来通りであるが、共有では各

農家から1~2人、計6~7人で組作業を行ない、オペレータ2人で連続作業をしている。

個人有は作業量等が47年より低下したが、規模が2~3haでありこの程度の作業量でも十分である。

共有ハーベスタは49年から共同利用したがその利点は、①各農家の労力負担の軽減、②搾乳時間帯も各農家1人出役すれば収穫作業は可能となり稼働時間が延長される、③作業中は補助者がついてワゴン内をならすので連続刈取りが可能、④オペレータ交替による連続作業ができる、⑤共同作業によりサイロ詰における作業の勢いが増加し、詰込時間も短縮される、などが有利性として考えられる。

共同利用によってこれらの利点が生じ表に示すように、稼働時間の拡大、実作業率の向上(47年:約25%, 49年:約35%)とともに収穫面積も20a以下から40~45aと2倍以上になった。しかし、稼働の効率化の面からは、まだ次のような問題点がある。

①サイロ詰の省力化、労働強度軽減のためのサイロ型

第1表 昭和49年と47年の作業実態の比較

所有形態	農家番号	収穫面積(a)		刈取回数(回)		延移動距離(km)	
		実態	増減	実態	増減	実態	増減
個人	No. 1	15.0	△ 5.5	3	△ 1	18.0	△16.4
	No. 2	20.0	△ 0.5	5	1	18.0	△16.4
共有	No. 3~6	45.0	30.6	9	4	6.0	△ 3.0
		39.5	25.1	8	3	12.0	3.0

注) 増減とは47年の実態に対するもので、△が減を示す。

第2表 昭和49年の稼働実態と47年との比較

所有形態	個人有		共有		
	No. 1	No. 2	No. 3~6		
1日の稼働時間(分)	501 (△64)	577 (12)	635 (80)	667 (112)	
内訳	実作業時間(分)	88 (△50)	93 (△45)	237 (97)	235 (95)
	作業以外の時間(分)	413 (△14)	484 (57)	398 (△17)	432 (17)

注) ( )は47年に対する増減で、△が減を示す。

式の検討，②遠距離ほ場における運搬作業省力化のための現地サイロの設置や換地等の検討，③十分な粗飼料を確保するには飼料基盤の拡大が必要となり，より一層の効率的稼働が要求され，そのために運搬用ワゴンの導入の検討，④排水対策を中心としたほ場基盤の整備，があげられる。特に排水対策については，このような排水不

良地域における水田酪農経営の全体に関する問題である。排水の良好化は飼料作物栽培上からも重要であり，またハーベスタ利用上からは，現在5月中旬以降でなければ困難な収穫作業が4月にも可能となり，2回刈により単位面積当りの増収となるとともに，ほ場での作業が容易になり効率的な稼働が期待される。